

萩原尊禮編著
山本武夫・太田陽子
大長昭雄・松田時彦 著

『古地震探求』

海洋地震へのアプローチ』

長谷川成一

本書を読了して痛感させられたのは、次

の二点であった。第一は、史料を正確に読みかつ理解することが、いかに重要で大切なことであるのか。歴史学を研究する者にとって、まさに研究の原点ともいべきことでありながら、我々はそれらを怠ってきたのではないかと、筆者のみならず本書を手にした方々はそのように自戒させられるに違いない。第二は、歴史学は果たして実用の学であるのか、古来いろいろといわれてきたし、意見は分かれるところであろうが、歴史学が災害研究にこれほど貢献し、実社会の要請にこれほど応え得る学問であったのかという点において、本書を一読して認識を新たにさせられた。

機的な関連を有している点で)実施した、ある意味では理想的にうまくいった研究成果であろう。

さて本書は、一九八二年に最初に世に問うた『古地震―歴史資料と活断層からさぐる―』(東京大学出版会)、ついで一九八九年の『続古地震―実像と虚像―』(同前)に続く、右二書の姉妹編ともいべき書である。表題にも見えるように、このたびは、新たに海洋地震を特に取り上げて古地震研究の領域を拡大しようという意図が込められている。本書は、その期待に違わず、次の七つの地震について綿密な考証を展開する。第I部各論として、「嘉保三年と承徳三年の地震―東海地震と南海地震―」「元徳三年の地震―『太平記』に見る紀伊千里浜隆起の疑問―」「正平十六年の地震―南海大地震、震害と津波被害の検討―」「文祿五年の地震―伏見桃山地震の総括的見解―」「慶長九年の地震について―東海・南海津波地震か―」「正徳元年讃岐高松地震―史料不吟味による誤認―」、このうち嘉保三年と文祿五年の地震は内陸地震であって、その他が海洋地震という。第II部は史料編として、

宝永四年、寛政元年、文政二年、文政十三

自然科学・防災科学の欠を「史学的調査」と「史学的考察」による成果がみごとに補い、本書ではむしろ歴史学の方から、それらの学問領域が陥った技術的な隘路を打開する糸口を提供しているのである。学際的な研究の発展が提唱されて久しいが、編著者を中心として長年研究を蓄積してその結果発表された、本書をはじめとする一連の古地震研究は、歴史学・地震学・防災科学などの、まさに異なる研究分野が共同して(単なるモザイク的な組み合わせでなく、有

年、嘉永七年の各地震に関する新史料を紹介している。

各地震の内容にわたる詳細については、

紙幅の制約から紹介できないが、各章では、まず『理科年表』や『新編日本被害地震総覧』『増訂大日本地震史料』『新取日本地震史料』などを博搜して、従来の各地震に対する見解と研究史を厳密に吟味し、史料の読解のありかたのみならず、史料批判さえもおこなって正確な地震像を描き出そうとしている。このように書くと、机上の操作で云々しているように見えるが、実はそうではない。現地へ実際に何度も足を運んで実地を踏査し、納得の行くまで史学的調査と地学的調査を重ね合わせて最後に地震学的立場からの見解を打ち出すという手法をとって、性急に結論を導き出すことを控え、禁欲的ですからある。各種の史料から、津波の波高、震度、また津波地震と規定可能なのか否かまでも、従来唱えられ信じられてきた定説に吟味を加えた。なかでも圧巻は、第六章の正徳元年に起きたといわれる讃岐高松地震について、それを記録する史料「珍事録」を徹底的に検証し、さらに当時の第一級史料である「多門院日記」抜書と比較

校合することで、当該の地震が架空の地震で後世の地震学者の誤認によるものと断定した。見事といえるべきであろう。

さて本書にあつては、人々の常識として従来信じられ、あるいは地震学を志す人々があたかも古典として依拠してきたさまざまな書に記された地震に関して、徹底的なメスを入れて、厳しく再考を促す。若干、気になるのは、執筆者たちの使命感に燃える熱意がそうさせるのであろうと推察されるが、時に筆が少々過激に走る向きがなしとはいえない部分が見られることである。またこのたび海洋地震を取り上げるのであれば、渡辺偉夫『日本被害津波総覧』（東京大学出版会 一九八五年）をも検討の素材とするべきであろうが、特にそうした形跡は認められなかった。右書を加えて考察すれば、記述内容にいつその深化が見られたのではないか、と思われた次第である。これは望蜀の言ともいえるべき筆者の思い入れにすぎず、本書の価値をいささかも減じるものではない。

編著者のまえがきに、このたびの出版によつて「古地震研究会」の仕事も一応の締めくくりとする旨が述べられている。まこ

とに残念であるが、編著者をはじめとする当研究会のメンバーも失礼ながら高齢の研究者が多くなつたように見受けられる。

しかし当研究会の古地震研究に対して注いできた、たゆまざる熱意と情熱、真摯な研究態度は次の世代へ継承されて然るべきものであり、是非、この火を絶やすことなく受け継いでいって欲しい。本書を手にした読者を代表して、筆者は切に願うものである。

（はせがわ・せいいち 弘前大学人文学部教授）

（A5判、三〇六ページ、五九七四円、東京大学出版会、一九九五年・七刊）